# 2022年 4月 17日（日） 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

## 説教「復活―走り出す朝」 ヨハネによる福音書 20章1-18節　髙橋彰

**20** 1週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。2そこで、シモン・ペトロのところへ、また、イエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行って彼らに告げた。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」 3そこで、ペトロとそのもう一人の弟子は、外に出て墓へ行った。4二人は一緒に走ったが、もう一人の弟子の方が、ペトロより速く走って、先に墓に着いた。5身をかがめて中をのぞくと、亜麻布が置いてあった。しかし、彼は中には入らなかった。6続いて、シモン・ペトロも着いた。彼は墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。7イエスの頭を包んでいた覆いは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった。8それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。9イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。10それから、この弟子たちは家に帰って行った。

11マリアは墓の外に立って泣いていた。泣きながら身をかがめて墓の中を見ると、12イエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使が見えた。一人は頭の方に、もう一人は足の方に座っていた。13天使たちが、「婦人よ、なぜ泣いているのか」と言うと、マリアは言った。「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」 14こう言いながら後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見えた。しかし、それがイエスだとは分からなかった。15イエスは言われた。「婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。」マリアは、園丁だと思って言った。「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。」 16イエスが、「マリア」と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で、「ラボニ」と言った。「先生」という意味である。17イエスは言われた。「わたしにすがりつくのはよしなさい。まだ父のもとへ上っていないのだから。わたしの兄弟たちのところへ行って、こう言いなさい。『わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る』と。」 18マグダラのマリアは弟子たちのところへ行って、「わたしは主を見ました」と告げ、また、主から言われたことを伝えた。

聖書 新共同訳（C）日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987,1988

イースターおめでとうございます。イエスは人びとによって十字架につけられ死なれましたが、神はイエスを死から復活させられました。神を父と呼び、神の御心と同じ思いに生き、神の業をなされたイエスは、まさにその態度と振る舞いによって「神を冒涜している」と攻撃されましたが、世の力によっても死によっても滅ぼされることなく、「わたしはすでに世に勝っている」（16:33）と言われたように、死さえも打ち破り、生きておられます。そしてイエスを「主」であると信じる人は「わたしの父でありあなた方の父、わたしの神でありあなた方の神」と復活のイエスが言われるように、神の子として神の愛のうちに招かれ迎えられていることを知るのです。

日曜日に神を礼拝するというのは、イエス・キリストの復活の出来事に根差しています。それは神の驚くような恵みの出来事、聖なる怖れの出来事に人びとが触れた経験を伝えています、そして復活の主イエスに出会った人びとは、それまでの安息日の習慣を変えて、週の初めの日に、イエスを「主」なる神です、わたしたちは神がご自分を現わしてくださったのを見たのですと言って、礼拝し始めました。教会が日曜日に礼拝をする意味は、習慣やしきたりではなく、逆に、人が習慣やしきたりという縛りから解放されて、自由さをもって神を礼拝したということの貴重な生きた証しです。教会はそれを大事に伝え続けたいものです。

今日は「復活―走り出す朝」と題しました。イエスの死体をお納めした墓を封じた石が転がされているのを見て、マリアは走りました。ペトロともう一人の弟子も、マリアの証言を聞いて走りました。どのような思いだったのでしょうか。恐れ、不安、心配？しかし走るというのは命の躍動を感じさせられます。大人が必死に走り出しました。墓の傍らでイエスの死を受け入れて悲しみ嘆きつつ弔い祈り続けるようなことを神は人にさせませんでした。人が思い至ることを超えた神の業は、マリアを、そしてペトロや弟子の心を駆り立て走り出させる力を湧きあがらせました。主イエスの復活は、イエスと共に、嘆きや失望や疲れによって動けなくなった心を、揺さぶり、震わせ、駆り立て走り出せるような力を与えます。そして走り出しながら神との出会いを経験してゆきます。

からっぽの墓は復活の間接的なしるしです。しかしそれは乱暴で急な事態が起きたのではなく、丸められた布が、落ち着いた出来事であったことも示しているようです。

ヨハネ福音書はそうした人びとの群れ、教会の原型を伝えながらも、そこにいる一人一人の主イエスとの出会い、交わりを丁寧に記します。信仰は、共に信じる共同体によって支えられていますが、深いところでは一人の人の主イエスとの出会いに根差すものです。マリアは泣いていました。「主が取り去られた」、失われたと思っています。泣きながら墓の中を見ると二人の天使が見えました。「誰を捜しているのか？」と天使たちは尋ねます。マリアはイエスの死を受け入れ、自分の心の拠り所、自分の心のうちに置いておこうとしています。そのようにイエスを所有しようとします。マリアは振り向きます。するとそこにイエスがおられます。しかしイエスが死んだと思っているマリアにはそれがわかりません。イエスはマリアの名を呼びます。マリアは再び振り向きます。死を見つめていることからいのちを見る心の転換と重なります。悲しみの中で独りで「すがりつく」ようなイエスとの関わり方、あり方から解き放たれ、「わたしは主を見ました」と、人びとに自分の言葉で神との出会いと、それが自分の心を駆り立てて生かしていると、他の人に伝えるちからを与えられました。